

八上城落城と本能寺の変

— 光秀「怨恨説」をめぐって —

山上 登志美

(一)

天正十年（一五八二）六月二日、天下統一を目前に控えた織田信長は、京都本能寺において、家臣の明智光秀に殺された。この名高い政変である「本能寺の変」は、なぜ起きたのか。従来より様々な説が挙げられてきたが、中でも「怨恨説」は強く支持され続けてきた。毛利軍と対峙している百姓出身の羽柴秀吉の配下に入って秀吉を助けるように光秀が信長に命じられたこと、安土を訪れた徳川家康の饗応役であった光秀が、不始末を信長に咎められ、森蘭丸に鉄扇で額を叩かれたことなど、人前で信長に辱められ、プライドを傷つけられた恨みが、光秀を主君殺しに駆り立てたとする説である。

更にもう一つ、光秀が信長に恨みを抱く大きな要因があったとされている。光秀の丹波国八上城責めにまつわる逸話である。八上城攻略の際、城兵たちの激しい抵抗にあい城を攻めあぐねた光秀が、城主の波多野秀治と和睦を結び、城を明け渡せば命を助けるとの約束の証しとして、老母を人質に城へ送った。光秀を信用して城を出てやって来た秀治を、信長は捕えて殺してしまい、これを知った八

上城の兵たちは、人質の光秀の母を殺害した。光秀は、信長が自分の願いを入れず秀治を殺したせいで母が惨殺されたと、信長を深く恨んだ、というのである。

天下統一を進める信長にとって、西国の毛利氏は大きな壁となっていた。毛利氏攻略のためには、摂津・丹波、そして播磨の反信長勢力が立て籠もる城を攻め落とす必要があった。播磨では、別所氏の三木城やこれに呼応した城々、宇野氏の長水城、赤松氏の上月城などに秀吉が差し向けられた。北摂・丹波では、松原氏の蒲公英城や能勢氏の能勢城、赤井氏の黒井城、波多野氏の八上城・氷上城などに光秀が当たった。信長の命によって秀吉や光秀に落とされたこれらの城々の「落城記」ともいうべき戦国軍記が地元によく残っている。『別所記』『長水軍記』『播州佐用軍記』『摂北有馬郡丹北城軍記』『能勢物語』『赤井伝記』などである。八上城の落城を描いた軍記も複数伝わっている。『榎井家日記』『丹波興廢略記』『高城軍記』『八上郷高城山城主の事』である。敗北した波多野氏の立場から描いたこれらの軍記には、本能寺の変を起す原因とされる光秀の恨みが、どのように描かれているのを見たいこう。

波多野側の軍記を見る前に、信長・光秀側の記録には、八上城落城の有様がどのように書かれているのかを押さえておこう。

『信長公記』天正六年（一五七八）十二月十一日条に次の記事が見える。⁽¹⁾

維任日向守（光秀）は直に丹波へ相働き、波多野が館取巻き、四方三里がまほりを維任一身の手勢を以て取巻き、堀をほり堀・柵幾重も付けさせ、透間もなく堀際に諸卒町屋作に小屋を懸けさせ、其上、廻番を丈夫に、警固を申付けられ誠に獣の通ひもなく在陣候なり。

光秀軍は波多野の館（八上城）を嚴重に取り囲み、兵糧攻めにする。その結果、翌天正七年六月には、

籠城の者既に餓死に及び、初めは草木の葉を食とし、後には牛馬を食し、了簡尽果無体に罷出候を悉く切捨、波多野兄弟三人の者調略を以て召捕り、六月四日、安土へ進上。則、慈恩寺町末に三人の者張付に懸けさせられ、さすが思切りて、前後神妙の由候。

と見え、激しい飢えに耐え兼ね、城外に逃げ出した者たちをすべて切り捨てたという悲惨な有様を伝えている。更に、城主の波多野兄

弟三人を「調略を以て」捕え安土に送り、磔にかけて処刑したことが記されている。この「調略」とは、敵陣の中の者に裏切りを誘う戦略とされ、丹波国の住人で光秀に味方した小島氏らに送った光秀の書状（天正七年五月六日付）にも、「城中調略之子細候間、本丸焼崩儀可有之候、（中略）於敵ハ生物類、悉可刎首候」とあり、城中の裏切り者を誘っているため、本丸が焼け落ちることがあるだろう、と光秀が八上城を兵糧攻めにした上で、敵方の者が寝返って城中に火を放つのを待っている様子がわかる。「調略」が示す意味がよく理解できる内容である。敵方の生き物は全て首を刎ねよ、という皆殺しも命じている。光秀が周到・冷酷に城責めを行い、八上城の落城は確実であることが読み取れる。また、これらの史料には光秀の老母を人質として城内に送ったという、本能寺の変「怨恨説」の基となる話は見当たらない。飢餓状態の城兵と裏切り者の存在で、攻撃側の史料とはいえ、波多野氏の敗北が明らかで、光秀からすると和睦に持ち込む必要のない戦況である。当然、母親を人質として波多野側に送る必要もない。

『信長公記』に依拠して成立した小瀬甫庵著『信長記』では「調略」をより具体的な内容で記す。⁽³⁾

去る程に丹波国波多野が居たる八上の城、去年三月より惟任日向守取囲み、堀柵幾重ともなく付け廻し責め寄する程に

城中^{かて}粮^{りょう}尽きて、初めは草木の葉を食したるが、究^{きはま}つて牛馬を刺殺し食しけり。中々こらふべき了簡もつき果てれば、余りの事にや堀柵を無体に乗越し出で、切り捨てらるゝ者も多かりけり。斯かりければ城中の者ども、為^{せんかた}方にやつきけん、波多野兄弟三人を召捕つて出しける程に、六月四日に安土へ惟任方より引かせ進上申しければ、度々表裏して侍の本意を知らざる者なりとて、則ち慈恩寺にして害し給ひけり。

城内の者が、城主を捕えて光秀方に引き渡した、というのである。この『信長記』にも光秀の老母の事はない。

(三)

それでは、敗北した波多野側の軍記を見ていこう。前述した『靱井家日記』『丹波興廢略記』『高城軍記』『八上郷高城山城主の事』を紹介する。『靱井家日記』の靱井は、波多野の家臣で丹波国靱井城の城主である。内容については、『戦国軍記事典 天下統一編』の『靱井家日記』の項⁴や松林靖明先生のご論文⁵に詳しい。丹波地方や国会図書館、国立公文書館・内閣文庫、京都大学図書館など写本が多く残っている。『丹波興廢略記』は、篠山市立中央図書館や個人蔵の写本など三本が確かめられた。『高城軍記』と『八上郷高城山城主の事』は、篠山市立中央図書館にそれぞれ一本ずつ所蔵され、異名同書と考えられる。ただし『八上郷高城山城主の事』は巻

末が欠損している。これら三作品は、内容に違いがあるものの影響関係が認められる。相互の関係についての詳細は、今後の研究に委ねるとして、ここでは、八上城落城と城主波多野秀治らの死去の場面にしぼって『信長公記』や『信長記』との違いを確かめてみる。

もつとも内容が簡略であるのが『高城軍記』（『八上郷高城山城主の事』）である。光秀の母親が人質として八上城内に入り、和睦を入れた波多野秀治は丹波国神尾山で光秀に対面する。光秀の家来が秀治を捕えようとしたところ、秀治は抵抗し数人に切りつけたのちに、刀を腹に突き立て、辞世の句を詠んで死ぬ。秀治の子の秀直（秀尚）も戦ったのちに刀を脇腹に突き立て自殺を図り重傷を負う。光秀の家来に取り押さえられ駕籠に押し込められ京都へ向かう途中、秀直は宮川村にて絶命した。神尾山で城主父子が「討死」と知った城内の兵たちは弔い合戦と称して抵抗したため、光秀は城を取り囲んで兵糧攻めにしようとする用意をし始める。それを知った城兵たちは、光秀の母親を引き出し高堀に上げて磔に懸け、城に火をかけて腹を切り、火に飛び込んで死んでいった。鎮火後に光秀が城に入ると見ると、城内の者たちは一人残らず灰になっていたという。

『靱井家日記』と『丹波興廢略記』の関係は、『高城軍記』との関係よりも密接であり、八上城落城と波多野秀治らの最期の様子はほぼ同じである。神尾山（『靱井家日記』は本目城）にて波多野秀治・弟の秀尚は光秀と対面する。このまま上洛して信長と対面するようにとの誘いを、秀治は作法が整ってから、と言って即座の上洛

を断った。席を立とうとする秀治を光秀や瀧川一益の家臣たちが取り押さえようとしたところ乱闘になり、秀治は刀を腹に突き立て自害をしようとする。重傷の秀治と秀尚、その他波多野側の侍十三人が生捕りとなって安土に護送されていった。その途中で秀治は、辞世の句を詠み、遺言して息を引き取る。遺言の主な内容は、信長・光秀への恨みと年を経ぬうちにその怨念を晴らすだろう、というものであった。信長と対面した秀尚は波多野家の正当性を主張し、「人非人の光秀」と信長に三年の内に思い知らせてやる、と恨みを述べた。その後、秀尚と十三人の生捕りは安土の慈恩寺にて切腹して果てた。八上城では、人質の光秀の母を打首にし、光秀軍に対して最後の戦を挑んだ。

波多野側から描いた軍記には、『信長公記』などが伝えるような兵糧攻めに苦しむ八上城や城内の裏切り者の存在、調略によって城主が捕らえられたことは一切見当たらない。秀治らは和睦によって自ら城を出て、光秀に強引に上洛を促された結果、切腹（討死）して果てた、あるいは安土慈恩寺にて切腹した、という点も「慈恩寺町末に三人の者張付」とする『信長公記』とは異なる。

正親町天皇の頃に禁裏御倉職を務めた立入宗継が書いた『立入左京亮入道隆佐記』⁶という記録がある。その中に次のような記載が見える。

多喜郡高城波田野兄弟。扱にて被送刻。於路次からめとり。安土へ馬上にからみつけつゝをさしほだしをうち。はたのお

とよい。はたものに被上候。前代未聞也。天正七年六月十日京都を通也。

捕縛された波多野兄弟が安土へ移送される途中、京都を通過した時の様子である。筒を刺し、縄をうち、波多野兄弟を磔のように馬上に括り付けたありさまは、前代未聞のことであった、という。さらし者にされながら安土へ送られていく憐れな秀治らの姿が生々しく伝えられている。

波多野側の立場に立った軍記には、当然のことながら波多野の汚点になる内容は描かない。信長・光秀と波多野は対等であり、波多野は和睦を受け入れて城を出たと描いている。そして対等である証拠として、光秀は母親を城内に送ったというわけである。

『靱井家日記』と『丹波興廃略記』は、更に本能寺の変にまで話が及んでいる。和睦を結んだ光秀と秀治らが対面した日が天正七年六月二日であり、その日のうちに重傷を負った秀治が亡くなったとする。本能寺の変が起こったのは、それから三年後の天正十年六月二日である。

東殿（波多野秀治）御最期の一言は三年の間に怨を報ぜんとも。此一念の願力は、一同の誓ひにて、最期の面々が齒を喰しばりて候。然るに不思議といふも愚かなる次第は、屋形様一家の本目の会合不慮の討死は、天正七年六月二日也、屋形も同日御最期を止め給ひて候。其後三年目、天正十年六月二日、明智光秀丹波より起りて己れが作り立たる七頭等を先鋒として、信

長父子を京都にて殺害し、己れも羽柴に討たれて国どもに亡ぼす。当家より不義を立て、候七頭ども皆一所に亡びたり。光秀が大恩の主君へ宿意立てたる其本をいへば、初め光秀は織田家随一の勇士と賞玩せられたるに、不仕合と当家の手先を受けて数年の内に悉く鋒先をくだかれ、悪名をとり、信長の折檻に合う事度々也。其内には羽柴、柴田等は大功を立つるほどに、漸々信長の心にそむき、己れも憤りを含み、例しなき不義を致したり。信長父子、明智らが亡びたるは、当家怨霊の二度の弓矢たるを見知るべし。

(『靱井家日記』)

秀治の命日の六月二日に本能寺の変が起こって信長が死に、ついで波多野の家臣でありながら裏切って光秀に走った七頭の者たちと光秀が亡んだのは、波多野の怨霊によるものだというのである。このように『靱井家日記』は、本能寺の変が「怨恨」によって起こったとするが、その恨みは一般的に言われる光秀のものではなく、波多野の恨みであるとする。光秀の老母人質の件も、光秀の信長への恨みを作る材料ではなく、光秀と波多野が対等で和睦を結んだという証しのための創作である。

本能寺の変にまで話が及ばない『高城軍記』の方が、『靱井家日記』『丹波興廢略記』に先行する可能性が高い。『靱井家日記』『丹波興廢略記』は、『高城軍記』に拠ったか、『高城軍記』と同じ資料に拠りながら、本能寺の変が起きた原因を波多野の「怨恨」と付け加えたのである。

(四)

豊臣秀吉に関する軍談講釈を小説化した『太閤真蹟記』という江戸時代の作品がある。十二編三百六十巻に及ぶこの実録の中に八上城落城の顛末が描かれている。浜田啓介氏は、『太閤真蹟記』の八上城落城の場面をとりあげ考察を加えられている。以下当該箇所について浜田氏のご論によって内容を紹介していく。

『太閤真蹟記』は、流布本と異なる記事の配置が見られる九州大
学国史研究室所蔵本(以下、異本とする)が知られている。流布本
とは異なる箇所は波多野滅亡の場面に当たり、異本にはこの場面が
三度描かれ、それぞれの内容に差異が認められる。異本の一度めの
八上城落城場面(第五編卷二〇・二一)は次のような顛末である。
光秀による丹波平定は激しい抵抗に遭う。播磨へ出兵している秀吉
は信長に申請して、弟の秀長を光秀救援に送り、秀長は、両波多野
の一方である水上城の波多野宗長・宗貞父子を滅ぼし、西丹波一帯
を平定する。多年にわたり丹波を攻めていた光秀は面目をつぶし、
特に信長が自分の軍に加勢をさせるのではなく、秀吉に命ぜられた
のは遺憾であるとし、「憤怒の勇気をあらはし進発す。之日向守主
君を恨むるの一つなり」と光秀が信長を恨む要因になったとする。
信長の不快を恐れながら光秀は東丹波の諸城を攻略し、続いて八上
城に攻めかかる。波多野秀治・秀尚はよく防戦して屈服の色がなか
った。光秀はわが身の不面目と信長の機嫌を恐れ、使者を八上城に

遣わし、速やかに旗を巻いて降参すれば、領地を安堵する旨を伝えるが、秀治らは承知しなかった。光秀が老母を人質として城へ送ったことで、ようやく秀治らは和睦を承諾した。

六月二日、秀治秀尚等光秀に対面の為八上の城を出て本目の城中へ来るの処を光秀伏兵を以て兄弟を生捕り、此時福井因幡守兄弟、靱井越中守討死、従兵尽く切尽し、早速波多野兄弟を京都へ送り遣しける。是に依て此輩を安土に遣し誅せらる。

八上城ではこのことを知り光秀の母を殺害する。その後、光秀は八上城を攻め落とし波多野を平定、「丹州一円光秀に賜りけるにぞ莫大の恩録、光秀抜群の立身、一国の守護と成りて悦ぶ事限りなし」と締めくくる。

ところが異本五編卷二十九は「波多野兄弟生捕らるゝ事并光秀主君信長を恨る事 丹州赤井家由来の事并刑部景忠雌雄猛獏を討事」であり、再度八上城落城の場面を取り上げている。母親を城に送り、和睦を入れた波多野兄弟が本目の城にやって来たところを生捕りにして安土に送るまでは、一度めの内容と同じであるが、この後、一度めにはない本能寺の変に関わる記事を載せる。光秀は城内の母を取り返そうとするが、城内では城主を捕えた光秀のやり方を憎み、主人兄弟が無事に帰って来れば母を返そう、と言う。光秀は安土へ使者を送り、波多野兄弟の死刑をしばらく猶予してくれるように願う。苦しむ光秀に兄弟処刑の知らせが届き、光秀はこれを極秘とするが、城内の者たちの知るところとなる。城兵は光秀らを櫓近くに

招き寄せ、「はやゝ老母を出すべしと申しければ、城兵ども五六人にて櫓の上に引立、生て帰すいわれなし、死骸を受取退け」と言つて、母親の死骸を逆吊りにして切下して、一同にどつと笑つた。光秀は全軍に下知して城へ攻め込み、犬猫にいたるまで生ある者はことごとく切り殺した、と述べる。続いて、この老母は光秀の実母ではなく叔父の妻であるが、幼少の時に養育してくれた実母同然の人である、と説明した後、

かなしみ余りて光秀主君信長をふかくうらみ、今一兩日せば、是非々々母を奪ひかへさんものと情なき主人のはからひ波多野兄弟誅戮の事御延引下さるべきむね願ひ出置つるに、一応の御告にも及ばずして誅せられけるゆへ老母終に帰る事あたはず。

と述べ、
聊も仁義なく我を不孝の罪人なりとなし給ふ事恨みなれ、と恨憤る事、骨髓に通る甚だ不快の色を顔はせり。是後日に謀反を企し憤怒の一つなり。

と、光秀の願いを入れず、信長が波多野兄弟を早々に処刑した結果、母親を城兵に惨殺されたことが、光秀が本能寺の変を起こす要因の一つになった、と「怨恨説」を明確に記す。

流布本には、異本の一度めの八上城落城にあたる記事はなく、第五編卷二十一は「波多野兄弟生捕らるゝ事并光秀主君信長を恨る事 丹州赤井家由来の事并刑部景忠雌雄猛獏を討事」であり、

異本の五編卷二十九の内容と一致する。浜田氏は、異本の方が先行し、異本の矛盾を訂正したのが流布本であろうとする。異本の一度めの八上落城記事（第五編卷二十一）が『太閤真蹟記』の初案であり、異本第五編卷二十九・流布本第五編卷二十一が後案であり、ここに光秀遺恨譚の伏線を置いているという。光秀の怨恨の来由を盛り込むべく、講釈者は、光秀の抜き差しならぬ情況を創り、光秀の心情に絶大な苦痛を与えて、しかもそれに対する信長の侮辱・嘲弄を以て、事柄を増加させ、目的である光秀謀反の理由づけ、もつともらしきを作ろうとした、と浜田氏は指摘する。

『太閤真蹟記』は、八上城落城の物語をこの後再度改訂している。第六編卷三（六編以降、流布本と異本の内容に大差はない）において、光秀は波多野や城兵たちに同情する情けの厚い武將に変化し、一方信長は「旧悪を憎むの心深き生質」で、波多野兄弟を無情に処刑する残忍な武將に描かれる。情けある光秀に迷惑をかけまいと、波多野一族十三人は潔く死んでいったとする。三訂に及んで、本能寺の変は、非道な信長を光秀が討つという設定に変化していく。そこには、老母人質の件は必要なく、削除されている。

(五)

『太閤真蹟記』にいたって、老母人質による本能寺の変「光秀怨

恨説」が定着したわけだが、それでは『信長公記』にはなかった老母人質の一件は、『太閤真蹟記』と『靱井家日記』『丹波興廢略記』のどちらが先行して入れた話なのであろうか。

貞享二年（一六八五）に遠山信春が著した『総見記』（『織田軍記』）卷第十九「惟任光秀丹州働ノ事 附赤井悪右衛門景遠ガ事」には、

六月二日、丹州に於て、惟任日向ノ守光秀、偽つて八上の城主波多野秀治を出し、東丹波を退治せしむ。其子細を尋ぬるに、抑も去月より以来、光秀東丹波へ攻め入り、同月中旬八田、波多賀須、八折、靱井の諸城を攻め取り、同月廿一日、波多野随一の武功の者、靱井越中守等を討捕り、何とぞ一日も羽柴等に先立つて東丹波を退治せんと、随分夜を日に継いで、精力を尽すと云へども、国人更に親伏せず、且つ又秀治究竟の残徒を集めて、八上の城に籠り、城地又嶮岨なれば、何程の大軍にても一旦に攻め取りがたく、空しく城を見上げて、暫く時日移す処に、

とあつて、このままでは人々の嘲弄を招き信長父子の機嫌を損なう、と思つた光秀は、敵方の高屋筑後と西蔵院・大善院という山伏を頼んで和睦を申し入れる。疑う秀治に光秀は老母を城内へ送り和睦が整う。秀治秀尚兄弟は八上城を出て、光秀が待つ本目城に向かう。

酒宴が始まったとき、光秀は隠していた兵に命じて波多野兄弟を捕え、そのほか波多野の従者十三人も生捕りにし、安土へ送る。

秀治は痛手負ひて、路次に於て死去し畢んぬ。其後秀尚等安土に於て生害の以後、丹州の残党等、光秀人質の老母を張付に懸けて殺し畢んぬ。同月四日、丹波国御敵、波多野氏兄弟三人、当所慈恩寺の町末に於て、張付に懸けさせ誅せられ、其外生捕ども悉く誅せられ畢んぬ。是れ則ち一昨日惟任光秀擲捕り、進上せしむるに依てなり。何れも最期の次第、一々神妙の由是を沙汰す。

この箇所はよく読むと、波多野兄弟の最期の様子が重複して記されていることがわかる。前半の傍線部の、秀治が安土への道中で死去したこと、秀尚らは安土で生害を遂げたこと、丹波に残る兵たちが人質である光秀の老母を殺したことの三点は『靱井家日記』の内容に一致する。後半の二重傍線部の、六月四日に波多野兄弟三人が慈恩寺の町末で磔に懸けられ殺された、とする点は、『信長公記』の記載に一致する。先に挙げた敵方の高屋筑後と西蔵院・大善院という山伏を仲介として光秀が波多野方に和睦を申し入れたという点、光秀と秀治らの対面の場所が本目城であったとする点、十三人の従者たちも生捕りにされたとする点は、『靱井家日記』の内容に一致する。

このように『総見記』は、『靱井家日記』と『信長公記』の両方に依拠して、八上城落城の顛末を書いたために、秀治秀尚兄弟死

去の記事が重複して書かれていることがわかる。もし、『総見記』が『靱井家日記』に先行するのであれば、『総見記』の波多野兄弟の最期の有様が重複するはずがない。『信長公記』と『靱井家日記』の二つの資料によって『総見記』が書かれたために起こった矛盾とした方が説明しやすい。

『太閤真蹟記』の成立は安永期（一七七二〜八〇）とする説があり、貞享二年（一六八五）に成立した『総見記』の方が先行する。

『太閤真蹟記』は『総見記』を参考にして成立したと考えられる。

『靱井家日記』から『総見記』、『総見記』から『太閤真蹟記』へと、八上城落城の話を進めていくことができる。『靱井家日記』は、波多野成長の過程を進めていくことができる。『靱井家日記』は、波多野氏や八上城の城兵たちの名誉を守るために、実際には兵糧攻めに苦しみ、飢えに耐え兼ねた城兵が、城主兄弟を捕えて光秀に引き渡した落城の経緯を創りかえている。光秀軍と互角に戦っていた波多野は、光秀の老母を人質として預かることで敵方からの和睦の申し出を受け入れる。『靱井家日記』における老母人質の話は、波多野と光秀が対等の立場で和睦を結んだ証拠として創られている。『総見記』は『信長公記』に拠りながらも、『靱井家日記』の内容も取り入れ、老母人質の件も『靱井家日記』から受け取っている。『総見記』の内容を読者の興味を引き付けるために改変したのが『太閤真蹟記』である。捕えた波多野兄弟を信長が殺害したために、老母を惨殺された光秀が、信長をひどく恨んだという、本能寺の変を扱

うときのお馴染みのストーリーである。『太閤真蹟記』は、本能寺の変という大きな政変の伏線とするために八上城落城を脚色したのである。

注

(1) 『信長公記』の引用には、奥野高広・岩沢愿彦校注『信長公記』（角川書店 一九九二年一月 七版）を使用した。

(2) 『新修 亀岡市史 資料編第二卷』（二〇〇二年三月）所収 59 「明智光秀書状」（小島文書）に拠る。

(3) 『信長記』の引用には、神郡周校注『信長記 下』（現代思潮社 一九八一年十月）を使用した。

(4) 『戦国軍記事典 天下統一編』「一部織田信長の抬頭 撰津・丹波の平定」『靱井家日記』（松林靖明先生担当）（和泉書院 二〇一一年十二月）参照。なお、『靱井家日記』の引用には、野々口政太郎他校訂『靱井家日記 限定版』（篠山毎日新聞社 一九三一年十二月）を使用した。

(5) 「籠城・落城の日記と軍記」（『日本文学 55 1 7』二〇〇六年七月）

(6) 『立入左京亮入道隆佐記』の引用には、『続群書類従 20 上』を使用した。なお、『立入左京亮入道隆佐記』については、『戦国軍記事典 天下統一編』「一部織田信長の抬頭 撰津・丹波

の平定」『立入左京亮入道隆佐記』（松林靖明先生担当）に詳しい。

(7) 「絵本太閤記と太閤真蹟記」（『読本研究新集 2』二〇〇〇年六月）

(8) 『総見記』（『織田軍記』）の引用には、『通俗日本全史 7』を使用した。